

『栄華物語』にみえる法華八講

はじめに

法華八講はよく知られた講会である。以前『中右記』にみえる法華八講について、考察したが、この小論では、『栄華物語』にみえる法華八講について、考察してみたい。個人の日記と、合わせ考察する事によって、法会としての法華八講を、より具体的に把握できればと思う。『栄華物語』は、周知のように宇多天皇から堀河天皇までの、十五代約二百年間の歴史を、宮廷を中心にして、編年体で描いたものである。『栄華物語』の中には、いくつか法華八講の例が、みうけられる。その主たるものを具体的にみていく事から、論を始めたいと思う。(猶、本文の引用は、日本古典文学大系による。頁数も同書による。)

一

イ、巻第七「とりべ野」所収年代は、長保二年(一〇〇〇)八月……

四年(一〇〇四)、八月迄の二年間

道長の病氣・道綱室御産・逝去等に続く箇所、記載されている法華八講である。長保三年九月十四日から開始されたものである。(『日本紀略』)

その年は丁度、女院(東三条女院)の四十の賀に当たっており、そ

の準備も行われようとしているのであった。それが、延び延びになっており、女院の方でも又、「八講せさせ給はんとて」急いでおられたのである。しかし、なかなか八講を行う段にならずに、九月には石山寺に詣うで「例のやうに御祈り・修法などにもあらで、滅罪生善のためとて、護摩をぞ行はせ給ふ。……又、萬燈會などさせ給ひて」後、石山寺を退出する。

(石山寺を出でさせ給て程なく御八講始めさせ給。すべて年頃の御八講には勝れたる程推し量るべし。講師達、此の世・後の世の御事めでたう仕うまつる。よろづをおぼし急がせ給御儀式有様、聞えさすればおろかなり。ゆゝしままであり。殿もそのけしき見奉らせ給て、よろづの山く寺くの御祈せさせ給。(上・二二四頁)

このようにして、八講が終わって、「十月に御賀」があったのである。この八講は、「此の世・後の世の御事めでたう仕うまつる。」ものであり、藤原詮子の現世の幸福と後世の菩提を祈願したものであった。

『日本紀略』には、

左大臣奉賀東三条院卅算、始修法華八講

とあり、明確に法華八講の開講の事情を、述べている。只、しかし東三条院詮子は現世の利益を念じた甲斐もなく、その年の十二月に四十歳を一期として、崩せられたのであった。

口、卷第八「はつはな」所収年代は、長保五年（二十十三）……寛弘七年（二〇一〇）までの約八年間

一条帝の女二宮（嬖子）の御病は様々の修法・読経の結果、一度は治癒したものの、再発して「この度は程もなく重らせ給て、一九歳で崩じてしまった。（寛弘五年五月）その悲しみの気持ちも未だ冷めない秋、法興院で八講が行われた。

秋のけしきにいり立つまゝに、土御門殿の有様いはん方なくいとおかし。池の辺りの梢遣水のほとりの草むら各色づき渡り、大方の空のけしきのおかしきに、不断の御読経の声ゝあはれ勝り、やうくく涼しき風のけしきに、例の絶えせぬ風の音なひ、夜もすがらまゝかはさる。一日までは法興院の御八講とのゝしりし程に、七日の日にもあひ別れにけりとぞ、幾十の羊の歩みを過し来るらんとのみこそ覚えけれ。

（上・二五九頁）

法興院は周知のように、藤原兼家の発病それに伴う出家に際して、二条院を寺になしたものである。正暦元年七月二日の逝去・その御法事（中陰忌）もここで、勤修されている。法興院の八講は六月の末から七月の始めにかけて開講されるのが、常であった。卷十二「たまのむらぎく」にも「七月のつひたちには、ほこ院の御八講など急がせ給ふ」とあり、藤原兼家の命日を結願として、恒常的に修されたものである。

八、卷第十四「あさみどり」所収年代は、寛仁二年（二〇一八）二月……三年二月迄の一年間

京極殿を新造した道長は、そちらへ移り住んだ。その直後三后並立して「世に珍しき事にて、殿の御幸、この世はことに見えさせ給ふ」といういわば絶頂の状態になった。その年の十二月に小一条院女御所生の男子が出生まもなく、他界する。引き続き中旬に道長は、法華八講を勤める。

殿にはこの頃御八講させ給はんとて、「よろずこの度は我寶ふるひ

てむ」と言はせて、いみじき事どもさせ給。院の御子の御事あれど、これはさやうの事におぼし障るべきにあらねば、急がせ給。我も七寶を盡くさせ給。御捧物、宮々殿ばらいといみじうかねてよらせさせ給ふ。かくてはじめさせ給て、常のかゝる御事どもの中にも、いみじく響かせ給。永昭いみじくめでたく仕うまつれり。御経は手づからかゝせ給へればにや、いみじく珍かなる事ども言い續けたり。殿ばらなどいみじう聞しめしはやし給。「瑠璃の經卷は靈鷲山の暁の空よりも緑なり。黄金の文字は上茅城の春の林よりも黄なり」など、いみじくしもてゆけば、殿の御前御剣を御手づから給はする程、覚え有様言はん方なくめでたし。「永昭の幸のいみじき」と、これにつけてもひとく宣ひける。「五巻の日は御遊あるべう、船の樂などよろづその御用意かねてよりあるに、明日とての夜さり聞しめせば、式部卿宮うせ給ぬとのゝしる。「あなあさまし、こはいかなる事ぞ。日頃惱ませ給などいふ事もなかりつるを」とて、殿の御前まづ走り参らせ給へれども、げに「限りになり果てさせ給ぬ」とあれながら、日頃ありて、御八講も果てぬ。

（上・四三〇頁）

この道長の八講は、大変華やかなものであり、自ら「法華経」二部を金泥で書いて、供養している。永昭の読んだ願文の一節にある「瑠璃の經卷・黄金の文字」という言葉は、道長書写の金泥の経にたいしての賛辞である。五巻を講じる所謂薪の行道の日は、舞楽・船樂の用意を、殊にしたのであるが、式部卿宮の薨去があつて、沙汰やみになつてしまふ。道長のこの八講は、先考・先妣の追善供養のために営まれたものである。その八講が、盛大に勤修された様子は、『小右記』に詳述されているところである。十九日には天台座主が、光臨した旨もみえている。

二、卷第十五「うたがひ」所収年代は、寛仁三年（二〇一九）三月……

十月迄の八ヵ月間

この巻は、道長の造寺開講等の善根功德について、主として記載している。摂政も頼通に譲りいわば後世の準備にとりかかる、院源を導師として、寛仁三年三月二十一日に五十四歳で出家する。出家し更に種々の功德を積んでいく。その様子は、「正月より十二月まで、年のうちのことどもに、一事はずれさせ給事なし。」という状態であり、「この隙くには、日吉の御社の八講行はせ給。」とある。日吉神社は仏教との関わりの深い神社であり、例えば「台記」（久安六年六月二十五日）をみると、日吉神社の宝前で金泥法華經一部を供養し、諷誦も行ったことが記載されている。又、康和五年の七月に日吉神社で一切経会が、始まった事が『天台座主記』にみえる。この巻で勤修されている一連の善根は、

◇我先祖より始め奉り、親しき疎きを分かず、すぎにし方より今行末に至るまで、菩提佛果を證し、且は自らの二世の願叶ひぬべくは……
(上・四五二頁)

◇又、八萬部の法華經を申し上げさせ給ふ。これら皆、滅罪生善のためとおぼしめす。

これらの助けとなるものである。なお、この巻は「道長の信仰生活を総括的に描いた巻として特異な一巻を形成している」のである。

ホ、巻第十九「御裳ぎ」所収年代は、治安三年（一〇二五）四月……
八月迄の五ヵ月間

五月下旬に阿弥陀寺で「日々に法花經一部、阿彌陀經四十九卷をぞ供養し」て、逆修を行う。更に、六月一日には、一条院の追善の御八講を円教寺で行い、七月には恒例の法興院の八講をし、「又その月の廿日の程に宇治殿におはします。そこにて御八講せさせ給ふなりけり。」とあり、引き続き三度の八講が勤修されている事がわかる。

一条院の崩御は、寛弘八年六月二十二日であり、『小右記』の六月廿

二日の記載のように実際は実施されたものであろう。又、法興院の八講は、「口」で既に触れたように、道長の父兼家の命日にちなんで修される、恒例の八講である。

宇治殿の八講は「そこを年頃遣遥所にせさせ給へりしかば、その懺悔とおぼしめして」〔於此處年來漁獵、爲懺罪……〕『小右記』勤修されたものである。

施主分で、
十千の魚、十二部經の首題の名字を聞て、皆切利天に生れたりとあり。況んや五日十座の程、講ぜられ給ふ法花經の功德、いみじう尊し。
(下・一一四頁)

と述べて、施主の功德を賛嘆している。

へ、巻第廿四「わかばえ」所収年代は、万寿二年（一〇二五）正月二日……同三月迄の二月

正月に皇太后妍子の大饗が行われ、二十五日の夜には、公任の四条の宮が焼失してしまうという事件がおこった。引き続きその年の三月に、

三月十餘日に大宮の御八講あるべしとて、女房もいみじう急ぎ、世中にも御捧物急ぎのゝしるめり。
(下・一八三頁)

とその準備にとりかかった由記されている。その後の首尾については皇后宮及び女御の御病気がひどくなった事などによって、記載されていない。しかし、『小右記』には、

今日於上東門宮、被修始八講之御讀經
(万寿二年三月廿日)

とある。

ト、巻第廿七「ころものたま」所収年代は、万寿二年（一〇二五）八月……三年九月迄の一年二ヵ月

万寿三年五月十九日、皇太后妍子は、

故三條院の御ために御八講せさせ給はんとて、佛皆造り奉らせ給へるに、五月十九日よりいそがせ給。 (下・二六八頁)

故三條院の追善供養の爲の、八講を勤修しようとしてゐるのである。

枇杷殿での八講は、天台座主の院源が出席するなどして、華やかに勤められた。その折の殿上人の座配や、装束の具合等、詳細に記載されている。特に第五卷の講ぜられる所謂新の行道の日は、殊の外華麗であつた。中務の宮から始まり関白・内大臣等が次々と、捧物をもつて列を造つて行道した。八講が終わると「御八講過ぎぬれば、宮の内日頃戀しく人々思ひけり。」と八講の行われた日の事を、なつかしく想起するのである。行事の間の参列者の華やかなみなりや、捧物の華美さが特に詳しく記述されている。

チ、卷第廿九「たまのかざり」所収年代は、万寿四年(二〇二七)四月……十一月迄の八ヵ月

皇太后妍子の病状は一段と悪化していくので、色々な平癒の爲の行いをした。その一環として道長は、法成寺に移御した釈迦像の供養をし、引き続き法花八講を行う。

御堂の佛供養、やがて御八講なれど、講師達ことごとくなし、たゞこの宮の御惱の由を、返々も心をとなへ祈り申給。例の皆百僧なり。

法服せさせ給。「百體の釋迦の一念の故に、御命を述べさせ給とも、百年は延びさせ給べし」など、あはれに尊くかなし、柱どもには法華經の心を皆繪にかゝせ給へれど、大方の僧達も、たゞ今はこの御事のみ心にかゝりて、静心なげなり。 (下・三〇五頁)

釈迦の供養と法華八講とを引き続きに修しながら専ら、妍子の御病氣の本復するのを祈願したのである。「大方の僧達も、たゞ今はこの御事のみ心にかゝりて、静心なげなり」という状態であつた。その妍子皇太后は「三月八日より惱ませ給て、萬壽四年九月十四日の申の時にう

せさせ給ぬ。」とあるように崩御されたのである。

リ、卷第卅七「けぶりの後」所収年代は、康平元年(二〇五八)……

治暦三年(二〇六七)迄の十年間

関白頼通は、宇治に御堂(平等院)を造立してそれに籠り、「網代の罪によりてにや、宇治に御八講せまほしくおぼしめす。」のである。宇治川に網代をしかけて、魚を獲つたのでその滅罪の爲に、法華八講を行つたのである。 (下・四七八頁)

『栄華物語』の文章では、次に高陽院宸筆御八講の記事が、記載されている。その記載はかなり詳細である。ここでは、その高陽院宸筆八講の事について言及しておきたい。高陽院は、周知のように後冷泉・後三条・白河等の各天皇の里裏として、使用されていた邸宅である。「九月十三夜に、高陽院の内裏におはしまし」(『今鏡』こがねのみり)で、

治暦元年九月二十五日に、高陽院にて、黄金の文字の御經、帝御み

づから書かせ給ひて、御八講行はせ給ひき。

とあり、後冷泉が御自ら金字で法華經を書写して、後朱雀院の追善の爲に八講を行っている。この八講の場合も、捧物の様子・装束の様子等詳細に描写されている。八講そのものについては、第五卷の講ぜられる日についての記事が多い。

◇五卷の日は、皇后宮下におはしませど、何事も向ひたるやうにて、行道なども同じ事御覽じつべし。 (下・四七九頁)

◇藏人薪こり水とりなどして、南西には舞樂例の事おもしろくめでたし。五日が説經いと尊し。かくめでたき事ども世にはありけり

と見ゆ。

(下・四八〇頁)

が、第五卷の日についての記述であり、四日八座の法要の内、五卷を講じる日が特に印象的であつたようである。

更にこの巻には、皇子中宮が白檀で製作した阿弥陀の三尊の供養を、

法華八講の折にしたという記事もみえている。(下・四八二)
 又、巻第卅九「布引の瀧」所収年代は、承保元年(一〇七四)……永

保三年(一〇八三)迄の十年間

頼通の永年に互って所領としていた白河殿の所に、法勝寺を建て、
 承暦元年に供養を行う。その翌年

二月一日、宇治にて故入道殿の御領に、八講などせさせ給に、四條
 宮も殿々も渡らせ給て、四五日ありて歸らせ給ぬ。

(下・五二九頁)

この場合は、頼通の宇治の屋敷で法華八講を行って、そこに四条宮や
 殿が御渡りになった事実のみを、記載しているだけである。他の資料
 にも此の事は記載がないようであるので、その趣旨等は判然としない
 が、宇治で実施された他の例をみると、宇治川の魚を獲った事にたい
 する滅罪の目的で、修されている場合が、多いように見うけられる。

ル、巻第四十「柴野」所収年代は、応徳元年(一〇八四)九月……寛

治六年(一〇九二)二月迄の七年半

寛治二年に、

二條院、故院の御墓所に御堂建てさせ給て、井院とて、東山なる所
 に、三昧堂建てられたる傍に、御堂建てさせ給て、御八講・五十講
 などせさせ給。故院・故宮のおはしまし、邊りにてかくせさせ給へ
 ば、「御罪も滅ばさせ給らん」など申す、いと尊し。後一條院・故中
 宮・後冷泉院の御事など申す、いと尊し。(下・五四四頁)

御堂に、後一條院の御影をかけて、その面影を偲びながら、八講を勤
 めたのである。その法会の意図するところは、後一條院をはじめ故中
 宮威子・後冷泉院の追善供養である。

以上、イ〜ル迄に概説したものが、『栄華物語』に描かれている法華
 八講のあらましである。法華経は当時よく周知されていた經典であり、

折にふれ時を選んでその経を講じる法要である法華八講は、色々な場
 所で営まれている。又、道長の頃から、八講のみならず三十講が行
 われている事も合わせ考えると、法華講の需要の程を窺いしる事が出
 来ようというものである。次にイ〜ル迄に、その概要を示したものを
 そう少し整理してみようと思う。

二

八講の概要を表にして示すと次の様になる。

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	へ
道長	道長	道長	道長	道長	(道長)
詮子	兼家	先考先妣 (兼家・時姫)	(先祖を含め て)有縁・無 縁の衆生 自分自身	兼家 宇治川の魚	太皇太后
後世菩提	追善供養	追善供養	追善供養 後世菩提 現世利益	追善供養	(後世菩提)
	法興院	土御門殿	日吉神社	円教寺 法興院	上東門宮
40歳の賀と して		道長が自ら 写金字法華 経を供養し たりして盛 大に		引き続いて 修されたも の	

ト	大皇太皇 后宮妍子	宮彰子	追善供養	枇杷殿	
チ	道長 妍子	太皇太皇 后宮	現世利益 (病氣平癒)	法成寺	百体釈迦の 供養にも同 時に
リ	頼通 後冷泉院	宇治川の魚 後朱雀院	殺生の滅罪 追善供養	平等院 高陽院	予定? 院御自写金 字法華經を 供養して盛 大に
又	師実?	宇治川の魚?	殺生の滅罪?	宇治殿	
ル	二条院	後一条院 中宮威子 後冷泉院	追善供養	菩提院	

おわりに

これらのものを見ながら、気付いた点をいくつか挙げてみよう。

- 一、施主は、道長とその一族に関わるものが、大部分である。
- 二、その対象となっている人物も、施主との関連ということもあって、道長とその一族が多い。
- 三、その八講開講発願の目的は、追善供養の為というのが一番多く、現世利益・後世菩提は同じ回数でそれに続く。
- 四、八講の内容についての記述は、他の法要に比較すると、第五巻の講ぜられる日(薪の行道の日)を除いて極めて少ない。
- 五、内容には記述は少ないが、八講の周辺(どういう装束・どういう捧物など)についての記述は詳細である。

以上の五つ位になるかと思う。これらの諸点を集約すると、法を講ずるといふ、いわば本来の講としての性格が変革して、多くの儀式・行事の一つとして、型の如くに勤修されている様子が、みうけられる。それは、五巻の日に船業を行ったりし、又それが中止になれば、「明日の御遊び止りぬ」(上 四三〇頁)と記している事からしても、充分に理解出来る。従って人々の興味も又、その八講で、どのような内容が講ぜられたかという事よりも、その周りの様子に向けられているのであろう。

道長が、施主をしているものが多く、その点のみでみると、私的に実施されているような印象を受ける。が、同時にそれが又、公的なものとなっている。これは、道長とその一族が、宮中に占めている位置の特殊性に、よるところが大であらう。

八講を儀式・行事のように実施し、又それに参列する事により、自分や一族の現世利益を祈願し、後世菩提を希求していた人々の様子を、伺い知る事が出来よう。そのような人々の願望に応じて、八講を営んできたのも、又事実である。その八講の隆盛は、三十講・五十講といった大規模のものを、うみだしていく事になるのである。

註

- ① 拙稿、中古日記にみえる、唱導儀式と、そのうけとり方
.....「中右記」にみえる、法華八講について.....

別府大学国語文学27号

- ② 『栄華物語全注釈』第四卷一二二頁 村松博司博士著 (角川書店)

- ③ 宇治に御八講せまほしくおぼしめす。「宇治にては例あし」など申せど、おぼしめし立ちにければせさせ給。」とあり、引き続いて「九月廿五日なり。……」と、高陽院の御八講の話に続いていく。

—平成元年九月三〇日受理—
(本学教授・国文学)